

湯婆ゆたんぼの暁のひとはだめでたけれ

藤田湘子

湯たんぽも懐かしい物のひとつとなった。あのブリキの波の手触りは今も指先に残っている。葉缶で沸かした熱々の湯を入れ、専用の袋に入れた後、それでもまだ熱いのでタオルにくるんで蒲団の足元に入れる。足裏をくつつけながら寝落ちゆく。

自分で湯たんぽを用意するのが約束だったような気がするが、母が前もって入れてくれていた夜が幾度かあった記憶もある。その温かさは格別のものであった。朝方になるとだんだんお湯が冷めてきて、湯たんぽは、ほんのり温かいほどになった。それを人肌のようにだとは、なんとエロティックなこと。「暁のひとはだ」で、より艶っぽい鑑賞に誘われ、この句を名句と感ずる次第。

1998年（H10作）第十句集『神楽』 鑑賞・野本京